

わが街熊谷遺跡めぐり 権現坂遺跡

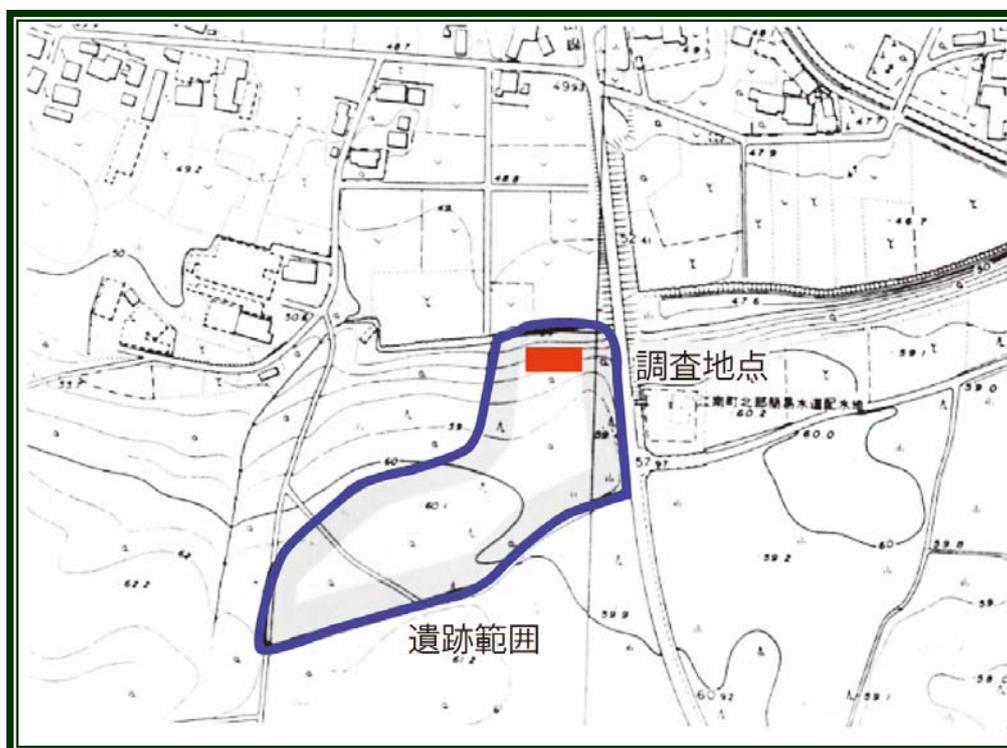
1 はじめに

権現坂遺跡は、熊谷市南西部千代地内の江南台地縁辺部に位置する、縄文時代中期から近世にかけての遺跡です。

江南台地崖線部の標高 59m前後の平坦地に位置し、北側は、比高差 10m程で、荒川沖積地に至ります。西側及び北側の江南台地崖線の斜面には、古くから埴輪製作遺跡の存在が知られており、埼玉県選定重要遺跡に選定されています。

1989年に、約 3500 m²の第 1 次発掘調査が行われ、縄文時代中期加曽利 E 式の住居跡 5 軒、集石土坑 13 基、土坑 21 基と、平安時代の住居跡 1 軒、近世の塚 2 基が確認されています。

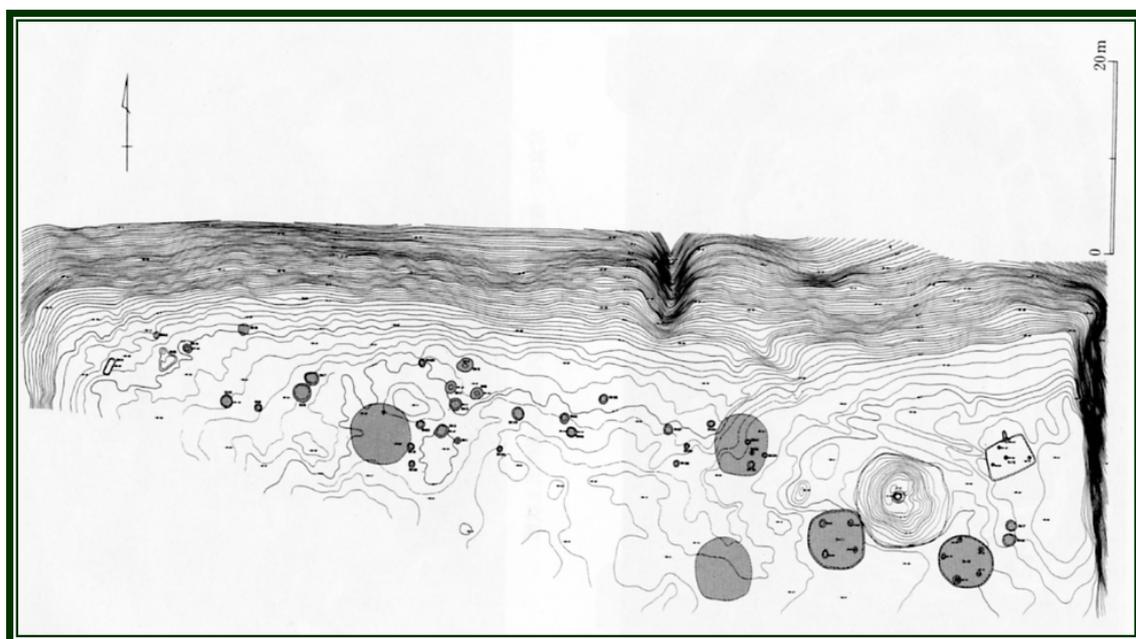
第 1 図 権現坂遺跡位置



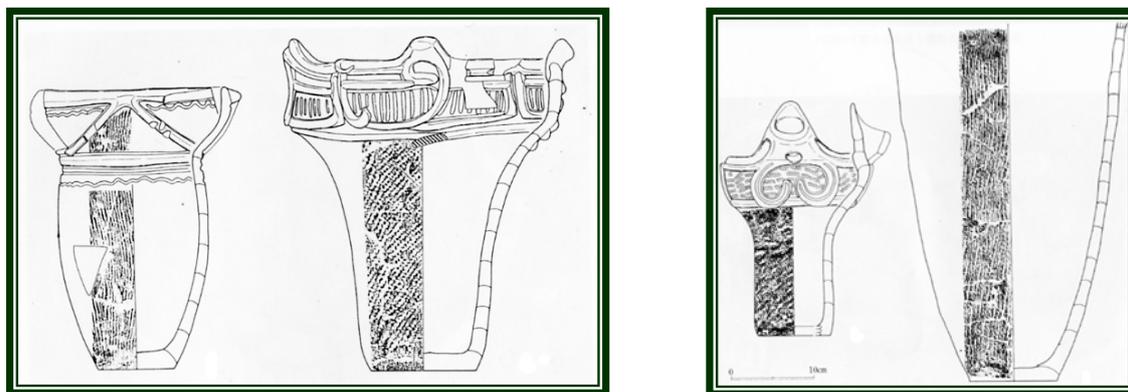
2 権現坂遺跡の調査

本遺跡は、縄文時代中期勝坂式期の終末に、集石土坑の構築により土地利用が始まり、加曾利 E1 式に住居跡を構築し、集落としての機能が開始されたことが確認できます。その後、加曾利 E2 式期以降の遺構・遺物が検出されないことから、加曾利 E1 式期をもって、集落は廃絶されたものと推測されます。短期間に営まれた集落であり、東側約 1.5km に位置する、勝坂式期後半から加曾利 E4 式期まで継続的に営まれた集落跡である東原遺跡との関連を考慮する必要があります。

第 2 図：調査区全体測量図



第 3 図：権現坂遺跡出土加曾利 E1 式土器



3 住居跡について

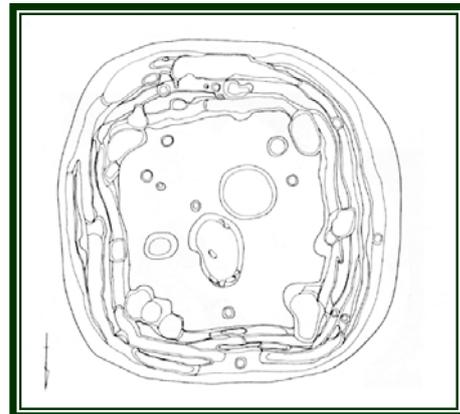
第2図・写真1は、縄文時代中期加曾利E1式期の住居跡です。直径6.1mの隅丸方形を呈し、深さは東側で32cm、西側で38cmを測ります。床面はタタキ状に硬化しており、壁際には3重の溝が掘り込まれています。炉跡は2箇所確認されており、西側の石囲い炉が新しく、東側の地床炉が古いと判断されます。支柱穴は、住居跡の四隅に認められ、床面からの掘り込みは、北西の柱穴が86cm、南西の柱穴が74cm、南東の柱穴が70cm、北東の柱穴が74cmを測り、掘り込みはいずれも深いのが特徴です。

周溝・柱穴・炉跡の状態から、本住居跡は少なくとも3回の建替え、または拡張が行われたものと考えられます。

床面に遺棄された状態で確認される土器は無く、床面より若干の間層を挟んで、遺物が多量に含まれる層が確認されています。住居跡が廃絶され、くぼ地になった状態で、土器の集中的な廃棄が行われたものと考えられます。

写真1：第11号住居跡

第4図 第11号住居跡平面図



4 集石土坑について

集石土坑とは、地面に穴を掘り焼けた石が詰まった状態で確認される遺構のことです。熱した石を穴に入れ、肉や魚等の食材を植物の葉で包み、蒸し焼き料理をした施設であると推測されています。

本遺跡では13基確認されており、掘った穴の底に、扁平な石を敷き詰める特徴があります。これは、荒川中流域における縄文時代中期後半の遺跡で特徴的に見られるもので、食物への熱伝導の効率化を目指した工夫と考えられています。

写真 2 : 集石土坑確認状況



写真 3 : 集石土坑下部配石



5 土坑について

本遺跡では、21 基の土坑が確認されています。その中の第 10 号土坑からは、完形に近い加曾利 E1 式土器 3 個体と大型の礫 1、小型の垂円礫 5 が検出されています。

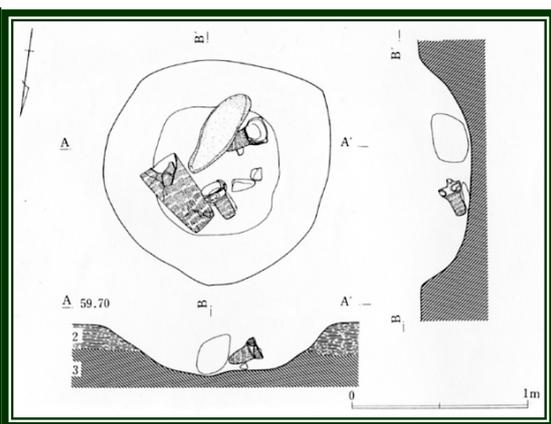
土坑の大きさは、長径 1.4m のほぼ円形で、深さ 0.3m を測り、坑底はなべ底形を呈しています。

用途は不明ですが、埋葬または祭祀にかかる特別な目的で埋められた遺物であると推測されます。

写真 4 : 第 10 号土坑遺物出土状況



第 5 図 : 第 10 号土坑平断面図



平成 23 年 12 月 2 発行

熊谷市立江南文化財センター（熊谷市教育委員会 社会教育課 文化財保護係）

— わが街熊谷遺跡めぐり — 権現坂遺跡 テーマ展解説書第 11 集